

# 国内旅行振興キャンペーン

# 「がんばろう！日本」に込められた意味

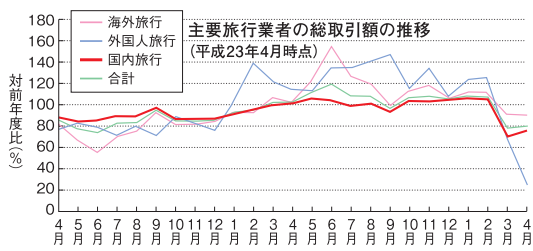
東日本大震災により、直接の被害があった地域だけでなく、それ以外の観光地においても自粛ムードを受けて、旅行者が著しく減少するなど、各地域にとって深刻な状況が続いた。

それを受けて、ゴールデンウィークを控えた4月21日からスタートしたのが、観光庁が観光・交通関係業界と連携した、官民合同による国内旅行振興キャンペーン「がんばろう！日本」である。これにより旅行を通じた被災地への直接の支援や、風評被害の払しょくにつながる取り組みなどの推進を図ってきた。

日本の経済にとって国内旅行は非常に重要であり、経済への貢献度は大変高く、地域への波及効果も大きい産業である（国内の宿泊旅行消費額は17・4兆円〔平成21年度〕）。

国内旅行全体が縮小してしまうと、地方経済への悪影響が広がり、各地域からの被災地支援の縮小にもつながってしまう。

国内旅行の活性化を通じて、各地域が元気になることが、被災地の支援にもつながっていくのである。義援金付ツアーやボランティアツアーといった直接被災地を応援する取り組みだけでなく、国内旅行の活性化を通じて、各地域が元気になることで、被災地を応援していく。そうした全国の観光関係者の気持ち「がんばろう！日本」の言葉に込められている。今、夏の旅行シーズンに向けて、さまざまな施策が新たに始まっている。



東日本大震災の旅行への影響が伺えるグラフ。国内旅行の総取引額は前年同月と比較して総取引額は26.7も%減少(2カ月連続)。海外旅行、外国人旅行も合わせると総取引額は22.1%減少した。

# う！日本



会津若松市で6月26日に行われたイベント「日本の元氣再生PROJECT JAPAN in FUKUSHIMA ~始まりのAIZU~」の様。アントニオ猪木氏のほか、稲垣淳一氏、川嶋あい氏、フラガールらが集結し会場を盛り上げた。

がんばろう！日本

検索

「がんばろう！日本」ポータルサイト

<http://kokunai.nihon-kankou.or.jp/>

「がんばろう！日本」で実施していること

4月21日から始まった国内旅行振興キャンペーンでは、先行的な取り組みとして、応援ツアー・ボランティアツアーや各種イベントで、東北・東日本地域への支援につながる取り組みを中心に実施してきた。

今年6月には、福島県会津若松市において『Project JAPAN in FUKUSHIMA ~始まりのAIZU~』を官民連携で開催。観光庁長官の溝畑宏も出席し、福島県知事、会津若松市長とともに、観光で復興を目指して宣言を行った。

また、国内旅行振興キャンペーン「がんばろう！日本」ポータルサイトも開設され、東北・東日本への旅行や全国のイベント情報など耳よりな情報の発信を開始。さらに、7月13日からキャンペーンを大幅拡充。ポータルサイトに、耳よりな情報を集約するとともに、新聞やインターネット、ポスターなどでサイトへの誘引を図るほか、写真、動画、口コミ情報なども活用して国内旅行への機運を盛り上げていく。

## 2 夏休みの宿泊旅行を バックアップ

この夏の国内宿泊旅行を促進するため、官民合同による国内旅行振興キャンペーンポータルサイト「がんばろう！日本」では、夏のおススメ旅行として、「3泊以上のおススメ旅行」「長期滞在」「若者よ、旅に出よう！」の3つのコーナーを設けている。

比較的長い夏休みが取れる長期休暇であっても、これまで旅行会社が提供するパッケージツアーは短期間の商品が主流だった。しかし、この夏の節電対策などを契機に長い期間での旅行に注目が集まっている。さまざまな旅の耳より情報や旅のスタイルを発信し、旅行者にメリット感じていただいたり、新しいスタイルに触れていただくことで宿泊旅行を推進していく。

「3泊以上のおススメ旅行」では、本キャンペーンに賛同した各社による3泊以上の場合にさまざまな特典がつくお得なプランなどを紹介している。

「長期滞在」では、長期滞在型旅行を推進している自治体や、長期滞在する場合には是非ご利用いただきたい各地域での体験プログラムなどを



左／岩手県盛岡市で8月1日～4日に行われる「盛岡さんさ踊り」。趣向を凝らした浴衣や演出で各グループが踊りを競い合う。  
右／高知県安芸市の観光名所「野良時計」。のどかな田園風景にたずみ、夏にはひまわりの景色も楽しめる。



# がんばら

作文コンテスト「夏旅！」は400字詰め原稿用紙で2～4枚（ワープ可）。観光庁ホームページ（<http://www.mlit.go.jp/kankocho/>）から応募用紙をダウンロードし、必要事項を記入してご応募を。締め切りは9月9日（金）当日必着。



バスで被災地に向かい、作業を行うボランティア・ツーリズム。

紹介している。なお、観光庁では、企業の長期休暇導入の促進も同時期に実施していく。これは、この夏の節電を機に長期休暇の導入や職員の旅行実施を取り入れる企業を増やしていくという試みで、国内宿泊旅行の振興へもつながっていく取り組みである。

「若者よ、旅に出よう！」では、学割プランやグループ・団体向けプランなど若者に向けた各社のプランを紹介している。また、被災地の震災復興を目的としたボランティア・ツーリズム（P・II参照）など地域との関わりや、やりがいを求める若者に向けた提案を後押ししていく。

そして、夏休みの旅の作文コンテスト「夏旅！」も実施される。これは全国の小・中学生を対象に、「旅をして、気づいたこと、見つけたこと」をテーマに、夏休みに電気を使わないエコ生活や、家族・友達との絆、今までは気づかなかった地域の魅力など、思い出や見つけたことを綴ってもらおうというもので、子どもを通じて旅行促進のプランである。各賞も用意され、最優秀者には観光庁長官賞が授与される。

ひと味違った夏休みを過ごした子どもたちの新鮮な感想が数多く寄せられることだろう。

観光庁長官

溝畑 宏



観光庁アドバイザー

中田英寿

官民合同による国内旅行振興  
キャンペーン「がんばろう!日本」  
の一環で、観光庁長官・溝畑 宏  
と観光庁アドバイザーを務める  
中田英寿氏の対談が行われた。  
2人の観光復興に向けた思いとは?



<http://kokunai.nihon-kankou.or.jp/>

「がんばろう!日本」スペシャル対談

# 今年の夏、祭りが、人の力が、 日本を盛り上げる

観光を活性化し、  
元気を積極的に発信

溝畑宏(以下M) この度、東日本大  
震災という未曾有の災害に見舞われ  
ました。現在、復興が進められていま  
すが、東北というのとはもと素暗  
らしい観光資源がある場所なんで  
す。

中田英寿(以下N) 僕は2年前から

日本各地を回る旅を続けていて、す  
でに30府県を訪れています。ただ、沖縄  
から北へ向けてスタートしたので、  
東北の旅はこれからでした。

M 東北は、例えば海沿いに素晴ら  
しい景観がありますし、気仙沼や石  
巻の魚介類は国内トップレベルを誇



るものです。米どころなので酒蔵が多く、また伝統芸能やお祭りも各所にあります。特に今年は東北新幹線が新青森駅まで開通したこともあり、観光客誘致に燃えていたんです。でも、そんな矢先に震災が起こってしまいました。

**N** 震災後は海外でサッカーのチャリティーマッチをオーガナイズするなど、僕ならではの形で復興の手助けになる活動が続いています。ただ、東北をじっくりと旅していたら、もつと違うアイデアが出てきたのかもしれません。そこは非常に残念です。

**M** 今は被災され、避難所におられる方も含めて、まだまだ災害の傷跡が残っています。一方で、被災はしたものの観光地として機能しているところも、実はたくさんあるんです。東北復興という中で、観光は非常に大きな役割を担ってきます。これから夏の観光シーズンですが、東北を元気にしていくための大切な時期だと思っています。

**N** 僕は観光庁のアドバイザーでもあり、旅行動静は興味深く見守っています。

**M** 観光庁では官民合同による国内旅行振興キャンペーン「がんばろう！日本」を推進しています。現在、直接被害があった地域だけではなく、風評被害も含めて旅行者が減少しています。でも、観光を活性化し、

日本の元気を積極的に発信していくことは、被災地への経済的かつ精神的な応援になると思うんです。このキャンペーンは、観光庁と観光・交通関係業界が統一のロゴやメッセージを使って、一丸となって国内旅行の振興を図る取り組みです。

## 将来的に新しい祭りを 作っていくのも大事

**N** 僕は国内を旅しているとき、伝統工芸や芸能、食文化などいろいろとフォーカスして見ているのですが、各地域のお祭りも実に興味深い。同じ日本人なのに、「えっ、そんなことやってるの？」と知らなかったものもたくさんあります。

**M** 個人的には阿波踊りのように参加できてみんなで楽しめる祭りが好



Hiroshi Mizohata

1960年京都府生まれ。自治省から大分県庁へ出向し、2002FIFAワールドカップの試合誘致、立命館アジア太平洋大学の設立を担当。株式会社大分フットボールクラブ代表取締役兼GMを経て、2010年より現職。



Hidetoshi Nakata

1977年山梨県生まれ。サッカー日本代表やイタリアセリエAなどで活躍。2006年に現役引退後、一般財団法人TAKE ACTION FOUNDATIONを設立、また観光庁アドバイザーに就任するなど多岐にわたり活動中。

きですね。でも、全国的に有名なものだけでなく、ローカルな祭りもアピールしていかなくてはいけないと思います。

**N** 国内には、まだまだ埋もれている祭りが多くいます。祭りは観光的にすごいコンテンツで、うまくアピールすれば日本人はもちろん外国人の人も見たいと思うはず。でも、今は少し自粛ムードが漂っていると聞きました。

**M** それは震災が起こった後、危惧していたことのひとつです。自粛ムードからいかに早く脱するかが非常に重要だと思っています。過去と決別し、前を向いて積極的に活動することは、結果的に被災地を応援することになるわけですから。そこで、4月上旬に「自粛をやめよう」という宣言を出しました。それから祭りや

花火大会を中止しそうなところに片っ端から電話したんです。「復活させましょう」と。それもあってか、東京では隅田川の花火や神奈川新聞花火大会など、開催が危ぶまれていたものが復活し始めました。

**N** 祭りは各地域に根付いた文化のひとつで、元々は神事ですけれども、観光という視点で考えれば、やはり大きい祭りがあればそれだけ多くの人が動くわけですよ。そのためには、将来的に新しい祭りを作っていくのも大事かもしれない。

**M** 私は京都出身ですが、葵祭や祇園祭など季節の端々に祭りがありました。祭りは地域のシンボルでもありますよね。

**N** これは個人的な考えですが、自分が悲しいときにまわりが悲しいと、もつと悲しくなる。でも、まわりが楽しませてくれれば明るくなるんです。だから、自粛するよりは明るく励ます形でのやり方があるだろうし、その方がいいんじゃないかと思えますね。

**M** 東北ではこの夏、復興を目指して多くの祭りが開催されます。被災してさまざまな課題を抱えている中で祭りを維持し、開催するのは本当に素晴らしい。そこに東北の皆さんの、自分たちの祭りに対する誇りが、象徴的に現れているのではないのでしょうか。

観光復興をめざす東北への旅

# 注目のスポット・平泉へ行こう



平安期の浄土思想を伝える毛越寺庭園。池の水は、奥にある滝から遣水(やりみず)を通して流れ込み、山から大海に向かう様子を表わしている。

6月、世界遺産に登録された岩手県平泉町。未曾有の震災を経た東北で、そのニューズは復興に向かうひとつの光だ。世界が注目する平泉の魅力と、観光客を受け入れるインフラ整備への取り組みを訪ねた。

## 平安時代に花開いた 平和・平等の浄土

岩手県平泉町は東北の中心に位置する。奥州藤原氏が平安時代末期に築いた都市は、当時のみちのく南端の白河関から北端の青森県外が浜を結ぶラインのちょうど真ん中。初代藤原清衡はこの地に「みちのく中央の尊い寺」として中尊寺を建立した。

東北初の世界遺産となった「平泉の文化遺産」は、中尊寺・毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・金鶏山の5カ所の「仏国土(浄土)」を表わす建築・庭園及び考古学的遺跡群が対象。日本特有の自然崇拜思想などと融合した浄土思想に基づく史跡が、世界に評価されたわけだ。

現在の平泉は緑に包まれた小さな町。そこに、かつての繁栄をしのばせる多くの見どころが点在する。

前九年合戦、後三年合戦という二度の戦乱を経てみちのくの覇者となった清衡は、金や漆、海産物など豊かな資源を持つ東北の地に、法華経



金色堂や日本最古の能楽堂など見どころ豊富な中尊寺。3000余の国宝・重要文化財を擁する。



毛越寺本堂。薬師如来を本尊としている。春の桜、夏の菖蒲、秋の萩でも知られる花の寺。



毎年8月16日に行われる「大文字まつり」。東福山(たばしねやま)に約200mの「大」の字が浮かび上がる。



名所が点在している平泉町は、時間があれば歩いて巡ることもできるが(JR平泉駅から毛越寺まで徒歩約15分)、巡回バス「るんるん」やレンタサイクルを使うと回りやすい。

●JR平泉駅までの主要アクセス……東北新幹線でJR東京駅からJR一ノ関駅まで約3時間、東北本線乗り換え約8分でJR平泉駅。

思想に根ざした平和で平等な浄土を作ろうと考えた。それは戦火にたおれた人々はもちろんのこと、獣や鳥、魚介、すべての命を祈念する鎮護国家を目指したものだ。中尊寺は、その深い思いを実感できる場所だ。

杉の巨木に囲まれた月見坂を上ると、本堂や多数の堂塔の奥に、かの有名な金色堂がある。柱や床、多くの佛像……と、まばゆい金に輝く5.5m四方の堂宇。御本尊の阿彌陀如来は無量の光を発する仏とされる。金は、その永遠の光によつて魔を払うものなのだ。

「五月雨の降りのこしてや光堂」——松尾芭蕉が『奥の細道』の旅で訪ねた

## 観光客受け入れへの さまざまな対応も

京の都から遠く離れ、都に匹敵する雅な文化都市を築いた人々がいた——。この歴史はまさに東北の誇りであろう。

お堂は、今も須弥壇の中に藤原三代の御遺体を守りつつ静かにたたずむ。二代基衡と三代秀衡が造営したのが毛越寺だ。平安時代の作庭様式を伝える日本最古の庭園が、ほぼ完全な形で残されていることで知られる。

庭はかなり広い。一般に浄土式と呼ばれるスタイルで、大きな池は大海を表わす。枯山水などが登場するはるか以前の、おおらかで超然とした庭園様式だ。隣接する旧観自在王院庭園、また近くにある無量光院跡でも、毛越寺同様の浄土式庭園が発掘・復元され、このみちのくの地に拓かれた文化のありようを伝える。

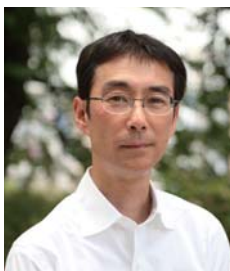
世界遺産に登録されれば、国内外から多くの観光客が訪れる。平泉では平成19年度から、受け入れ態勢整備のため国・県・町が一体となった取り組みが進められてきた。

「国土交通省としては、公共交通の整備や、外国人観光客に向けての案内表示などの多言語化、広域観光圏としてのソフト充実などを広く支援してきた」と話すのは、東北運輸局観光地域振興課長の藤澤義人。





右／町内の史跡を巡るのに便利な巡回バス「るんるん」も整備。停留所には英語も併記した。  
右下／各所に景観に似合う多言語案内表示を設置。レンタサイクルや徒歩で巡る人にも役立つ。  
上／駅から中尊寺に向かう通りには、行灯(あんどん)をつけた。今後、歩道の整備なども進む。



東北運輸局  
企画観光部 観光地域振興課長  
藤澤義人



観光案内板には地図の史跡名や解説などが日本語の他4言語で表記。これは毛越寺のもの。

以前は、史跡に向かう道路は常に渋滞に悩まされていた。そこでマイカーから巡回バスへの転換を促進。地元商店街と提携した特典付きフリーパスを発行するほか、土日祝日には便数を2倍に増便した。また、平泉周辺の観光地を広域的に周遊可能なエリアフリーパスの創設も支援した。

「観光の振興に最も大切なのは、その土地に行く足と、中での移動の足。次は平泉を核に東北各地を観光できる交通網の整備も進めます」(藤澤)

多言語化では、バス停は英語併記、案内看板やパンフレット、ホームページなどは日本語・英語・ハンゲル・繁体字・簡体字の5言語表記とした。またソフト充実の一環として、観光ガイドのできる「語り部タクシー」を認定。講習会では英語や中国語での簡単な会話講座も開催している。

「今後は通過型観光地から滞在型観光地へと転換を図るため、朝の勤行見学や坐禅・写経体験、農業体験などと農家民泊を絡めた平泉ならではの地型旅行商品の造成に対し、町や観光圏、東北農政局などと連携を図りながら積極的に支援していきたい」(藤澤)

町ではこれからの平泉についてどのように考えているのだろうか。

平泉観光協会会長の小野寺邦夫さんは、「平泉は900年余の歴史の中、幾度も攻められても、一度も他を

## 平泉は「祈り」の地です

東日本大震災後、観光客数は大きく落ち込みましたが、ゴールデンウィーク頃には徐々に回復。今は世界遺産効果もあり、多くの方がこの町に来てくださるようになりました。平泉は藤原清衡の「抜苦与楽」の言葉にあるように、苦しみを取り去り楽しみを与える浄土を表現した土地です。この祈りの心や安らぎ、他者への思いなどは、つらい災害を経た今、大きな意味を持つのではないのでしょうか。心とむ平泉を、ぜひお訪ねください。



社団法人平泉観光協会会長  
小野寺邦夫さん

攻めたことがない平和思想の地です。その価値は大変に大きい。我々も世界遺産登録に向けてさまざまな勉強を重ねましたが、その過程で皆の認識が高まり、これまで以上にいい町になりました」と話す。

「京都や奈良に負けない文化を持っていた東北の都の魅力伝えていきたいですね」(小野寺さん)

いまや世界に広く知られるようになった平泉。復興に向かう東北を支援する意味でも、ゆつくりと足を運んでみたい。

## 被災地への取り組み

## ボランティア・ツーリズムを実施

東日本大震災をきっかけに、注目を集めたボランティア・ツーリズム。誕生までの経緯、反響について観光庁の担当者に聞いた。



岩手県陸前高田市にて。住民からの「来年の田植えに備えたい」との依頼に応え、田を覆い尽くす瓦礫の撤去作業。



上／同じく陸前高田市。田の瓦礫撤去作業には、重機が使えないため、多くの人手を必要とする。下／岩手県釜石市で、側溝に溜まった汚泥の除去作業。

※写真は全て、(株)ダイヤモンド・ビッグ社提供。

## 被災地とボランティア希望者をつなぐ試み

東日本大震災のような大規模な災害では、被災地の復旧・復興のためにボランティアの力が欠かせない。震災直後やゴールデンウィークには多くの人が参加したが、徐々に減少し、現在も各地でボランティアの数が足りない状況が続いているという。

ボランティアに参加したい。しかし、「どうやって参加していいかわからない」「交通手段や宿泊場所が確保できない」「被災地にかえって迷惑をかけないだろうか」などの心配から参加に踏み出せないケースも多いだろう。

そうした被災地とボランティア希望者のマッチングのため、旅行業者があらかじめ、受入先の災害ボランティアセンターと調整を済ませた上、出発地から宿泊先、宿泊場所間の交通手段、滞在中の食事、宿泊場所などを確保し、受入側負担を軽減すると共に、宿泊・飲食といった消費行動で被災地の経済的復興を支援するのがボランティア・ツーリズム。



全行程を終え、早朝に帰着したボランティア参加者たち。新宿駅にて。

すでに販売された商品では募集から即日完売したものも多い。旅行業者によっては1400人もの予約待ちが出るほどの大きな反響を呼んだ。「観光庁では平成22年度に、若年層に対する国内旅行振興策の一環として、ボランティア活動など『特定の目的を持った旅行による旅行需要喚起』を、民間業者と共に調査・検討していました。そのため、図らずもそのノウハウ・成果を被災地の復興支援へ迅速に活かすことができたという経緯があります」

そう語るのは、観光庁観光経済担当参事官付主査の大江和俊。4〜5月の実施当初はボランティア活動だけを目的とした商品が主流だったが、現在は被災地・周辺地域の復興支援の目的で、東北各地の観光地への観光を組み込んだ商品も支援している。

「ボランティアを必要とする被災地の実情を探りながら、よりよい形で継続していければと願っております」(大江)

観光庁では災害発生当初のボランティア活動のみを内容としたバックツアーを「ボランティア・パッケージ」(※1)、その後の復興段階に行われる一部純粋な日程も組み込んだものを「ボランティア・ツアー」(※2)と呼び、これらを含む全体を「ボランティア・ツーリズム」と称している。